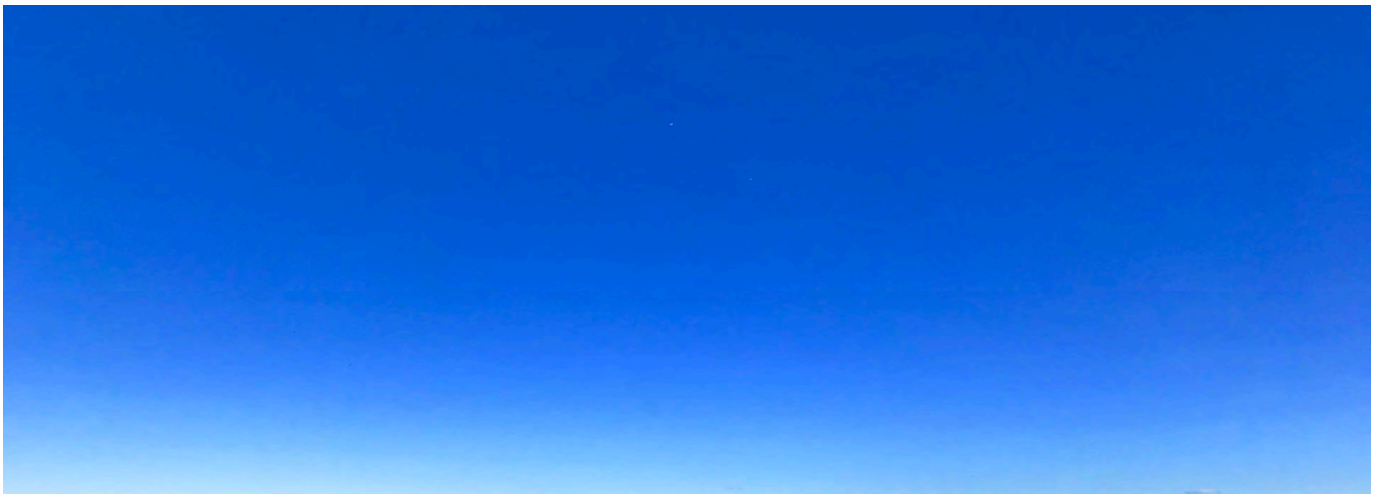


2018 年度
ニューサウスウェールズ大学
海外日本語教育実習報告書

お茶の水女子大学大学院

日本語教育コース

目次

巻頭言　（森山新）…… 3

【Part 1】実習の実際
1.実習の概要（劉文鈺）…… 5
2.UNSW の日本語教育（劉文鈺）…… 6
3.実習の内容（全員）…… 8
4.その他の活動（姜芳雨）…… 17
5.セミナー等への参加とその他のリソース（王舒茵）…… 19
6.事前学習（宣婷婷）…… 21

【Part 2】生活と実習感想
1.諸手続きと生活（王丹叶）…… 24
2.実習を通して学んだこと（全員）…… 28

おわりに（程寧）…… 36
総評（森山新）…… 38

巻頭言

森山　新

日本語教育コースの海外日本語教育実習は、2011 年度にニューサウスウェールズ大学(以下「UNSW」)と本学との間に大学間学術交流協定が締結されて以降、翌 2012 年度よりほぼ毎年のように開催されている。

2018 年度は 6 名の院生が参加して実施され、全学年の授業で実習が実施された。また事前学習として、日本語教育コースの加納なおみ先生が「日本語教育実習」の授業を通し実際のシラバス作成や教壇実習などについての事前研修を実施したほか、UNSW の日本語教育について理解を深めるため、森山が『外国語学習の実践コミュニティ』（トムソン木下千尋編、ココ出版）を教材に勉強会を実施した。

6 人の実習生たちはいずれも日本語を母語としない大学院生であったが、熱心に準備を行い、実際の実習授業に取り組んでいた。その姿は実に優秀かつ熱心なもので、受け入れ機関の先生方からも、学生たちからの人気も高く、今後もぜひお茶大から学生を派遣してほしいなど、実習生の実習を高く評価する声が多数寄せられた。

日本語教育を専攻とする学生たちは、単に研究者としてだけではなく、教育者としての顔も有している。さらにグローバル時代において、海外に積極的に出て行き、活動する社会性も必要としている。その意味でこの海外日本語教育実習の定着・発展は非常に意義深いものと言わざるをえない。また日本語教育研究は日本語教育の発展に資することが要求され、その意味でも研究と並行して日本語教育実践を伴うことは非常に好ましい形であるということができよう。そう考えると、今回、海外日本語教育実習生が増加し、かつ参加した学生が大きく成長してくれたことは、非常に喜ばしいことである。

本報告書は、参加者が実習を通じどのような学びが与えられ、どのような成長を遂げたかということを示すとともに、これから海外実習を行おうとしている学生たちに、実習の意義を伝えてくれることが期待される。この報告書を読んだ多くの学生が彼らに続き、海外に赴き、教育者としてグローバル人材として大きく成長する機会を得ていただければと思う。

最後になったが、本プログラムの成功のためにご尽力くださった、UNSW の先生方、本学学生の送り出しにご尽力くださった加納なおみ先生をはじめとした日本語教育コースの先生方に心から感謝の意を表したい。

2019 年 3 月

森山新（海外日本語教育実習担当）

【Part 1】
実習の実際

1.実習の概要

今回の実習は「日本語教育方法論演習」の授業として、2018 年 8 月 20 日～9 月 21 日の 5 週間にわたってニューサウスウェールズ大学（The University of New South Wales、以下 UNSW）にて行われた。担当教員は森山新先生、参加者は全員日本語教育コースの博士前期課程 1 年生： 程寧、王舒茵、姜芳雨、王丹叶、宣婷婷 、劉文鈺であった。実習期間は、程寧、劉文鈺が 1 年生、王舒茵、宣婷婷が 2 年生、姜芳雨、王丹叶が 3 年生と 4 年生で実習を行った。細かい内容については、次章以降で説明する。

実習の流れ

日付	内容
4 月 5 日(木)	説明会（森山）
25 日(水)	渡航準備に関する説明会（森山）
5 月 14 日(月)	事前研修開始（森山）　※1
7 月 30 日(月)	事前研修終了
8 月 18 日(土)	出国（程寧、王舒茵、姜芳雨、王丹叶、宣婷婷 、劉文鈺） （8 月 18 日～31 日には森山が現地指導に当たる）
19 日(日)	大学案内
20 日(月)	授業見学説明会、授業見学開始　※2
23 日(木)	トムソンゼミ勉強会参加　※3
31 日(金)	*North Sydney Girls High School* 訪問
9 月 2 日(日)	第 49 回 UNSW 日本語弁論大会参加
21 日(金)	実習終了
23 日(日)	帰国

※1　隔週の月曜日
※2　5 日間全てのレベルを見学
※3　毎週の木曜日

2. UNSW の日本語教育

外国語教育の教授法には様々なものがあり、UNSW の日本語教育の現場で盛んに行われているのは実践コミュニティ（CoP）である。

【実践コミュニティとは】

ウェンガー（Wenger 1998）は最初に提唱した概念で、同様の問題に取り組んでいるエンジニアのグループや、新しい技術を模索している外科医のネットワークなど共通領域で集団学習のプロセスに従事する人々によって形成されるコミュニティである。

【なぜ実践コミュニティ】

外国語教育の授業は教室内で行われているため、教室外（社会活動など）で必要とされる実践を教室内で行う可能性を探るという発想で提案された。

【UNSW における実践コミュニティ】

・上級生と下級生の実践コミュニティ

初級のコースに中級後半の先輩（ジュニア先生*）が参加したり、日本語でインタビューをしたりするなど、レベル間の交流が活発に行われる。

*ジュニア先生 : Professional 以上の先輩で、下級生のコースに参加し、授業中の学生をサポートする役割を果たす。

・教師チームの実践コミュニティ

学生の「実践」の機会を作るコミュニティ。

・シドニーに在住日本人との実践コミュニティ

キャップストーン*（Capstone）のクラスでは、シドニーの日本人居住者の前で日本に関するリサーチの発表が行われる。

*キャップストーン : 日本語研究専攻最終コースである。学生たちは日本研究の中のテーマを一つ選んで、グループに分かれて調査を行い、最後は日本語話者の前で発表をする授業である。

・学校間の実践コミュニティ

9 月に行われるスピーチコンテストには、UNSW から毎年学生が参加している。そこでは、高校生や他大学の日本語学習者とも交流がある。

以上それぞれを一つのコミュニティと考え、大学内の場面では各学年間、教師・学生間、大学外では学校間、そして学生と日本語母語話者の間、いわゆる学生たちを取りまく全ての環境を統合し、さらに大きなコミュニティが形成される。

このように、教室内と教室外の境界性を超え、様々なコミュニティとの相互作用により、教室での実践と社会の実践を両方参加し、良い学びができると考えられる。

クラス編成

クラス		専任講師	非常勤講師
日本語	Introductory（A, B）	福井先生	大浜先生、松井先生
	Intermediate（A, B）	飯田先生	中村先生
	Intermediate（A, B）	飯田先生	中村先生
	Advanced（A, B）	岡本先生	
	Professional（A, B）	橋本先生	

その他	Capstone	福井先生、トムソン先生	
	Culture	飯田先生	
	Writing Japanese	岡本先生	

3.実習の内容

実習内容（全体）

ここでは実習を概観する。

Introductory Japanese B

担当教官：福井先生、橋本先生、 大浜先生、松井先生

実習生：程寧、劉文鈺

使用教材：『げんき 1 』『げんき 1 ワークブック』『コースノート』*

担当コースについて

・1 年生を中心とした日本語初級後半のコース。

・前学期に開講されていた Introductory Japanese A の続きとなる。

・学生は 1 週間の間に、Lecture2 時間、Tutorial1 時間、Seminar2 時間の計 5 時間の授業を受ける。

*『コースノート』は、活動シートや目標会話など、『げんき 1 』を補うための教材として使われる。

学習目標について

・家族、食べ物、そして旅行計画について話すことができるようになる。

・レストランで食べ物を注文することができるようになる。

・人の外見・容貌を表現できるようになる。

・145 漢字（新しい漢字= 87）とその組み合わせで短い文章を読み書きできるようになる。

・有能な共同言語学習者になる。

【Lecture】

・学生 170 名程度。

・講堂で日本文化の紹介、文法事項の説明やドリル練習などを行う。

・Lecture の資料(パワーポイント)は毎週 Moodle にアップされ、学生が予習できるようになっており、講義の際にプリントアウト又はタブレット、PC などを持込み手元に置いて講義を受ける。

【Tutorial, Seminar】

・少人数クラス（学生は各クラス 25 名程度）。

・それぞれクラス登録者のメンバーが異なっている。

・Lecture で説明を受けた項目を文脈の中で使えるようにする、運用練習中心。

実習について

・教壇実習：水曜日、木曜日の Seminar

・授業参加：月曜日の Lecture に参加し、その週の主な内容を事前に把握した。また、火曜日の Tutorial(1 クラス)に参加することにより、学生が学習項目についての理解を確認した。これらの授業に参加した上で、水曜日と木曜日の Seminar の教壇実習を行った。

Tutorial

実習の内容

Week	主な内容	実習生が行った内容	
5	・ない form ・「何もしませんでした」 ・漢字の復習	20 分	クラスを回って学生の支援
6	・「ないでください」 ・ゲーム It's on the list ・書き換え、Dictation ・漢字の練習	30 分	JR 先生と一緒にゲームのサポート クラスを回って学生の支援
7	・「と思います」 ・「行っていました」 ・音読の練習	30 分	クラスを回って学生の支援
8	・「一番」 ・読む練習 ・漢字の練習、Dictation	25 分	クラスを回って学生の支援
9	・「私の家族」作文手本の紹介 ・「これは私のです」 ・「どこかに行きましたか」 ・「何がしたいですか」 ・漢字の練習、Dictation	30 分	クラスを回って学生の支援

・チュートリアルのクラスには、学習者が 20～25 人程で、今回は大浜先生のクラスを中心に見学させていただいた。
・チュートリアルのクラスで「学生をサポートすること」が主な役割で、教壇に立つことはなかった。「学生をサポートすること」は具体的に言えば、ペアがいない人がいたらペアになって一緒に練習、学生の質問に回答、ゲームに参加、手助けなどだった。

Seminar

実習の内容

week	主な内容	ロールプレイ	実習生が行った内容	
5	人の描写： 着ているもの	「～さんはどんな人ですか」	0 分	見学しながら、学生をサポートする
6	注文： ・数字の練習 ・日本食について音読 ・食べ物を注文する練習 ・モデル会話の練習	レストランで注文する	20 分	・「～ている人です」についての文法練習 ・数字の練習 ・注文する練習
7	・比較 ・もう・まだ ・クラスで誰が一番遠くに住んでいるかを探すタスク	私の家	90 分	・「～のほうが～より・いちばん」「もう・まだ」文法練習 ・時間の練習 ・タスクの説明、インタ

				ビューのデモ
8	・単語のウォームアップ ・「～つもりです」文法・会話練習 ・「～になりました」	なし（テストの準備のため）	60 分	・しりとりゲーム ・「中間休みに何をするつもりですか」会話練習
9	インターアクションテスト		タイムキーパー、評価	

・今回の実習生が担当させていただいたセミナーのクラスには、学習者が 20～25 人程と福井先生と実習生(程、劉)の他に、UNSW の JR 先生がいた。
・120 分×4 クラス(Seminar)のうち、Week6 では、文法の説明、練習(20 分)を一人四回ずつ担当した。Week7、Week8 では、授業を一人二回ずつ行った。
・セミナーでは学生を中心に文法練習、モデル会話の練習とロールプレイを行なっている。教師の言葉を減らし、学生の言葉を増やし、学生は 2 人ずつでペア練習、5～6 人で様々なグループ活動を行っている。学生同士はお互いにフィードバックする。ペア活動とグループ活動を通じて学生のコミュニケーション能力を有効に高める。

★時間割(Introductory)

Introductory（程、劉）					
	月	火	水	木	金
9:00		Introductory Tutorial 1			Introductory Seminar 6
10:00		Introductory Tutorial 2			
11:00		Introductory Tutorial 3			Introductory Seminar 7
12:00		Introductory Tutorial 4	Introductory Seminar 1	Introductory Seminar 3	
13:00		Introductory Tutorial 5			
14:00			Introductory Seminar 2	Introductory Seminar 4	
15:00	Introductory Lecture	Introductory Tutorial 6			Introductory Seminar 8
16:00		Introductory Tutorial 7		Introductory Seminar 5	
17:00		Introductory Tutorial 8			

Intermediate Japanese B

担当教官：飯田先生、中村先生
実習生：舒茵、宣婷婷
使用教材：『初級日本語 II げんき』(教科書、ワークブック、コースノート)
担当コースについて：
・二年生を中心とした日本語初中級後半のコース

・前学期に開講されていた Intermediate Japanese A の続きとなる。
・学生は 1 週間に、Lecture2 時間、 Tutorial2 時間(4 つのクラスに分かれる)、計 4 時間の授業を受ける。

【Lecture】
・大講義室で行う
・学生は 100 名以上
・毎週前もって授業の資料(文法、漢字など)が授業のページ(Moodle)にアップされ、学生が予習できるようにしている。
・授業後、授業のビデオが Moodle にアップされる。

授業の始まりにお知らせ、授業に関する連絡を説明する。次に、前の 1 時間は、日本の伝統文化、生活事情などを紹介し、その次に今週の文法を例文を使って説明する。1 時間目の授業が終わり、その息抜きとして、今週の Lecture Leader(プロジェクトの 1 つとして、毎週二人の学生が担当する)が、日本文化に関するテレビ番組、ビデオをクラスに紹介する。2 時間目は新しい漢字の説明をした後、ワークシートを学生に配り、解答させる。ワークシートの内容は毎週授業の内容に応じて、学生の聴解、読解、作文能力を試すものである。

実習生の役割：
・日本文化、事情を説明する時、クラスに自分の体験をシェアし、練習活動に参加する。また、教育実習のために、メモを取る。
・学生がワークシートを書いている時、クラスを見回り、学生のサポートをする。

【Tutorial】
・四つのクラスがある。
・学生は各クラス 25 名程度である。
・担当の先生は飯田先生と中村先生（非常勤先生）である。
・主に宿題のチェック、文法の復習および運用練習という三つの部分に分けられる。

時間割

Intermediate(王ジョイン、宣)					
	月	火	水	木	金
9:00		Intermediate Tutorial			
10:00					
11:00					
12:00		Intermediate Tutorial			
13:00	Intermediate Lecture				
14:00		Intermediate Tutorial			
15:00				Intermediate Tutorial	
16:00					
17:00					

１週間のスケジュール

曜日	予定	担当先生	振り返りおよび授業準備
月	Lecture(14:00～16:00)	飯田先生	先生との教案の最後の確認

火	Tutorial 1(9:00～11:00)	飯田先生	Tutorial 2 の反省
	Tutorial 2(12:00～14:00)	中村先生	Tutorial 2、3 の反省
	Tutorial 3(14:00～16:00)	中村先生	
水			
木	Tutorial 4(15:00～17:00)	中村先生	Tutorial 4 の反省
金	反省会（18:00～19:00）		次週の教案作成開始
土			次週の教案作成 メールで教案の提出
日			

・毎週火曜日の Tutorial が終わったあと、実習生の二人は飯田先生の研究室で反省会を行った。また、先生から次週の授業内容をいただいた。
・毎週金曜日の反省会の時、実習生全員が反省と目標を報告した。
・実習生の二人は相談しながら、教案を作成した。
・先生からフィードバックをいただき、実習生二人でお互いへのフィードバックも行なった。
・木曜日のチュートリアルが大学院の勉強会とぶつかったので、出席できない場合もあった。

各週の実習内容と実習生の役割

Week	内容	実習生の役割
5	・近所迷惑 ・受け身（れる/られる） ・形容詞＋する；名詞のように/みたいにする ・漢字（信、経、台、風、犬、重、初）	・自己紹介 ・学生からの質問に答えること ・資料の配りと回収
6	・日本人と宗教 ・ている/てある/ておく ・～間/間に ・漢字（若、送、幸、計、遅、配、弟、妹）	・3 つのクラスで一人ずつ 20 分ほど授業を担当すること（Tutorial 4 を除く） ・資料の配布と回収
7	・日本の教育システム ・使役（せる/させる） ・漢字（記、銀、回、夕、黒、用、守、末）	・3 つのクラスで一人ずつ 20 分ほど授業を担当すること（Tutorial 4 を除く） ・1 分間スピーチの司会者とタイムキーパー ・資料の配布と回収
8	・使役の受け身（せられる/させられる） ・～なさい ・動詞の命令型 ・のに ・漢字（待、残、番、駅、説、案、内、忘）	・1 人ずつ 2 つのクラスで 120 分の授業を担当すること 王：Tutorial 1、3 宣：Tutorial 2、4 ・資料の配布と回収
9	・ことわざ ・書き言葉 ・～までに ・漢字（顔、情、怒、変、相、横、比、化）	・ことわざの説明 ・クイズの質問を読むこと ・1 分間スピーチのセカンドドラフトにフィードバックすること ・資料の配布と回収

【Public Speech Project】
日本語でのコミュニケーション能力、スピーチ能力を促進することを目標とするプロジェクトである。学生が自分の経験に合わせて自分なりの考え方を述べることが求められている。スピーチプロジェクトは一学期の時間(W1~W13)をかけて行い、学生全員が参加する。第 1〜2 週の間に、各自に自分が興味を持っているトピックを決め、トピックが近い学生(3~5 人)がグループを作る。そして、第 4 週まで、第 1 回のドラフトを書き、プロジェクトのウェブページにアップする。第 6 週まで、Tutorial の授業とオンラインで先生、シーニャ先生、クラスメメイトのフィードバックを受ける。第 7 週目に、Interaction Test でパネルの形で、クラスメイトの前で発表し、同じグループの学生から、質問、コメント、アドバイスなどを受け、それらに答え、対応する。実習生は、そのテストのサポートをする。受けた質問、コメントに基づき、第 2 回のドラフトを作成し、第 9 週目に、Professional クラスの学生が Tutorial に参加する時、先輩、シーニャ先生、教育実習生に見せて、もう一回アドバイスを受ける。アドバイスをもとに週の終わりにドラフトを提出し、もう一回オンラインで先生のコメントをもらう。第 10 週に各自練習し、スピーチのビデオを撮り、アップし、第 11 週まで、学生がコメントし合う。学期末(W12~W13)にスピーチ発表会が行われる。

<u>Advanced Japanese B</u>
担当教官：岡本先生
対象学生：日本語 3 年生
実習生：王丹叶、姜芳雨
使用教材：主教材『上級へのとびら』

実習について
【Lecture（120 分）】
　日本語三年生全体（60 名余り）を対象とする講義式授業。主教材の読解文と関連したテーマのプレゼンテーションを通して予備知識を学ぶ。また、新しい関連文型や語彙を導入し、簡単な練習文を作る。授業の始めには、前の週の練習文のフィードバックを行う。その他に、クラスごとに持ち回りで学生が作った練習問題も行う。前の週に学んだ文型を使った文の発表と意味の確認（文法の練習）、ディクテーション（書き取り練習）、漢字のワークシート（漢字の練習）の 3 つがある。また、日本の歌を毎週 1 曲学生が紹介する時間もある。
【Tutorial（120 分）】
　Lecture を 3 つのクラスに分けて、20 名ほどを対象とし、Lecture で学んだ読解及び文型・話題の応用活動を中心とする授業。

その他、評価に関わる活動
・プロジェクト A：（食べログプロジェクト）：シドニーにあるレストランに行き、ウェブ上の食べログと口頭発表にて紹介するグループ活動。この時期に来校する東北大学の学生を含め 4 名前後のグループを作り、計画・取材・ウェブ上の食べログページの作成、発表、評価までを 1 学期間かけて行う。日本人学生との協働学習活動を通して、より実践的な日本語応用能力を身につける。
・プロジェクト B：スピーチコンテスト出場、ボランティア、2 年生の講義のヘルパー、授業の日直（Tutorial でリーダーとして動いたり、クラス内で作成した練習教材をま

とめて先生に送ったりする係）など、日本語を使う学内外の活動をいくつか選び参加することにより、日本文化・社会などの理解を深めながら日本語能力を向上させる。

・インターアクションテスト : Week9 に一度実施。テキスト第 9 課で学んだ教育のテーマに基づき、学生 2 名、教師 1 名、計 3 人で会話を展開する。その中には別の課で学んだ「褒める」「褒められる」のやり取りも含まれ、言語・非言語行動が評価対象となる。

授業及び実習内容

Week	Date	Lecture Content 講義内容	Tutorial content チュート内容	実習生の取り組み
5	20 Aug	＜第 7 課日本のポップカルチャー＞ 先週の文法フィードバック 今週の文法の導入 ・L7-12,13,14,15 オノマトペ 学生による学習活動 ・文法の練習 ・漢字の練習 ・書き取り練習 今週の歌	・食べログプロジェクトの確認 ・プロジェクト B の多読リーディングナイトの連絡 ・宿題チェック ・講義活動の準備 ＜第 7 課日本のポップカルチャー＞ ・オノマトペの練習(教科書 160 ページ) ・会話練習とロールプレイ(困った状況を説明する/苦情や不平を言う)	Lecture も Tutorial も見学。
6	27 Aug	＜第 9 課日本の教育＞ 先週の文法フィードバック 先週の文法の復習と今週の文法の導入 ・L7-12,13,14,15&L9-1 日本の教育について 学生による学習活動 ・文法の練習 ・漢字の練習 ・書き取り練習 今週の歌 東北大学の学生と会う	・食べログプロジェクトの確認 ・インターアクションテストのパートナーを決める ・宿題チェック ・講義活動の準備 ＜第 9 課日本の教育＞ ・UNSW の学生の教育について話す ・「読み物」の前半内容確認	Lecture も Tutorial も見学。
7	3 Sep	先週の文法フィードバック ＜第 9 課日本の教育＞ ほめる・ほめられる 文法ノート L9-4,6,7,9,10 学生による学習活動 ・文法の練習 ・漢字の練習	・食べログプロジェクトの確認 ・インターアクションテストの連絡 ・宿題チェック ・講義活動の準備 ＜第 9 課日本の教育＞ ・「読み物」内容確認	Lecture は、見学。Tutorial は 50 分を担当。

		・書き取り練習 今週の歌	・「読み物」についてディスカッション・質問を答える ・「ほめる・ほめられる」を導入 ・「会話」内容確認	
8	10 Sep	先週の文法フィードバック ＜第 9 課日本の教育＞ 日本人のジェスチャー 文法ノート L9-11,13,14,15,16,17 学生による学習活動 ・文法の練習 ・漢字の練習 ・書き取り練習 今週の歌	・食べログプロジェクトの確認 ・宿題チェック ・講義活動の準備 ＜第 9 課日本の教育＞ ・会話文 4 ・教育についてのディスカッション ・インターアクションテストの練習	Lecture は、見学。Tutorial は全てを担当。
9	17 Sep	食べログ発表	インターアクションテスト	Lecture では食べログ発表の評価、Tutorial ではインターアクションテストの Japanese Speaker 役、及び評価者として参加
10				

★時間割(Advanced)

Intermediate（王、姜）					
	月	火	水	木	金
9:00					
10:00		Advanced Tutorial			
11:00					
12:00		Advanced Tutorial			
13:00					
14:00					
15:00	Advanced Lecture				
16:00		Advanced Tutorial			
17:00					

<u>Professional Japanese B</u>

担当教官：橋本友見子先生

対象学生：日本語 4 年生

実習生：姜芳雨、王丹叶

使用教材：特定の教材はなし
担当コース概要
・3 年生を中心とした日本語上級コース
・前学期に開講されていた Professional Japanese A の続きとなる。
・学生は 1 週間の間に、Lecture2 時間、Tutorial2 時間の計 4 時間の授業を受ける。
・授業のコンセプトは「自分の日本語に向き合う」「日本語を使う」
・授業は全て日本語で行われる。
【Lecture】
・シアター教室でテーマに関わる動画を見たり、先生の説明を聞いたりコメントシートに答えたりする。
・学生は 39 名
・Lecture の資料は毎週 Moodle にアップされ、学生が予習できるようになっており、講義の際にプリントアウト又は PC などを持込み手元に置いて講義を受ける。

【Tutorial】
・中くらいの教室で行われる。Lecture で書いてもらったコメントシートをみんなで共有したり、グループ分けてディスカッションしたりする。
・14 時からのクラスは 25 名、16 時からのクラスは 14 名

実習について
・四年生に対して、先生は何かを教える立場ではなく、学生がそれぞれ自分で勉強を進めるようにリソース、考え方を提供する。よって、実習生は教壇に立たず、先生をサポートすることや学生を助けることなどの形で参加する。
・Lecture で学生と同じく先生から出されたコメントシートに答えて、Tutorial でグループに入り、学生と一緒にディスカッションして、課題を完成した。
・プロジェクトの調査計画を見て、コメントした。
・プロジェクトで同級生として学生のインタビューを受けた。
・筆記テストの解答用紙を見て、採点した。

その他、評価に関わる活動
・日本語研究：日本語についてテーマ（e.g.「敬語」「若者言葉」「四字熟語」「助詞」など）を各自決め、Professional クラス、Intermediate クラス、1・2 年生の後輩・同級生・日本人に対してインタビューをすることで研究していき、学期末に発表する。

Schedule
各週の内容

Week	主なテーマ	Lecture 内容	Tutorial 内容	実習生の取り組み
5	ひらがな カタカナ 漢字	<アンケート> 漢字だけで長い言葉を作ろう	・グループ対抗漢字カードゲーム ・漢字がどうやって作られたか考える	・アンケート回収
6	オノマトペ	英語と日本語を比べる	オノマトペについての動画を観る	・アンケート回収

		<アンケート> ・好きな/面白いオノマトペ ・好きな食べ物とそれに合うオノマトペ		
7	試験 日本語研究	学期末試験	・試験の解説 ・先の予定を立つ	
8	日本語研究	＊三年生の時間と重なったため不参加	同級生へインタビュー	・インタビューを受ける
9	日本語研究	ビデオを見る	日本人へインタビュー	・インタビューの手伝い

★時間割(Professional)

Professional（姜、王）					
	月	火	水	木	金
9:00		Professional Lecture			
10:00					
11:00					
12:00			Professional Tutorial		
13:00					
14:00			Professional Tutorial		
15:00					
16:00					
17:00					

4.その他の活動

<u>金曜ミーティング</u> (毎週金曜日 18:00～19:00)

金曜日のキャップストーン（15:00～18:00）の授業後に行なった。教員メンバーとして、トムソン先生、福井先生、飯田先生、岡本先生（不定期）、橋本先生（３週目から参加）が参加して、実習生全員と一緒に一週間の授業について、「反省したいところ」と「来週の目標」を話し合った。実習生はレベルごとに一週間自分が参加した（担当又は見学した）授業を振り返り、自分の気づきや勉強したこと、反省したいことをシェアして、当学級の先生がフィードバックする形となっていた。皆は自分の経験を言いながら、他人の経験からも勉強でき、ポジティブな雰囲気で進んでいく感じとなっていた。最後は実習生一人一人「来週の目標」を設定して参加者とシェアした。目標を設定することは自分にとって努力するモチベーションをあげることができる。そして、自分の目標がきちんと達成されているかどうかを他人からチェックされるという機能が働いている。そのため、毎週自分の内省を通して、新しい目標を立てるのは重要だろう。

<u>訪問先</u>

今年は一昨年と同じく年少者を対象とする第二言語教育を行なっている学校、North Sydney Girls High School に訪問した。

・訪問日: 8 月 31 日(金)

・7～12 年生が通う公立女子校。言語科目は Heritage コースか第二外国語コースで学ぶことができ、French, German, Japanese, Latin, Mandarin の中から選択できる。今回は私たち実習生がまず自分のことを簡単に紹介してから、自分が好きな日本料理や日本のお菓子などを学生に紹介した。嬉しかったことは、今回のトピックは学生にとって身近な話題だったので、学生から非常にいい反応がもらえたことである。

・コンタクト:トムソン先生の紹介で、溝尻サリー先生とコンタクト

http://www.northsydgi-h.schools.nsw.edu.au/

※訪問の際の留意点

・できるだけ早い段階で訪問したい機関、全員が共通して空いている時間(もしくは空けられる時間)を決めておくこと

・お土産を準備しておくといい

・子どもの写真を撮らないこと

・時間の余裕を持って訪問すること

5.セミナー等への参加とその他のリソース

5.1 セミナー等への参加

① トムソン先生勉強会

・ 教育実習生は立場上 Visiting Junior Research Fellow としてニューサウスウエールズ大学を訪ねるので、訪問中勉強会に参加し、自分の研究を進めることも大事である。そこで、毎週木曜日 16:00～18:00 のトムソン先生の勉強会に参加することが必要である。勉強会は、トムソン先生のゼミ生を中心に行っている(ほかの研究者も参加している)。勉強会では、はじめに必ずその前の週の研究進捗状況を報告し、今週の予定を報告する。そして予定通り、自分の研究を報告したり、プレゼンテーションのリハーサルをしたりする。実習中、実習生は各自に自分の研究計画を報告し、皆さんからのご意見、アドバイスをいただいた。

② 18th International Symposium of Processability Approaches to Language Acquisition
第 18 回処理可能性理論のアプローチで言語習得を考える国際シンポジウム(PALA)

・テーマ：処理可能性理論の 20 年を振り返るそしてその展望

・ 開催日＆場所:2018 年 9 月 14 日(金)～15 日(土)シドニー大学

・ キーノート発表者：西シドニー大学　Catherine Best 氏
パーダーボルン大学　Manfred Pienemann 氏
ケンブリッジ大学　Boping Yuan 氏

処理可能性理論は認知的アプローチで、第二言語学習者の中間言語がいかに再構成を繰り返し、低いレベルから高いレベルへ、徐々に第二言語に近づけていくその過程を説明する理論である。第二言語習得における大切な理論の一つとして、提唱者の Manfred Pienemann 氏を始め、20 年に渡り、多くの研究者に用いられている。今回のシンポジウムは 2 日に渡って、発表者が処理可能性理論のフレームワークを使い、異なる母語(中国語、日本語、ドイツ語、インドネシア語など)の学習者が目標言語(英語、ノーウェー語など)の文法、語彙、音韻などを習得するプロセス、また研究で見えてくる問題、示唆などを発表した。そして、Pienemann 氏が講演を行い、今までの研究アプローチ、すなわち研究者が調査対象者を集め、実験を行い、データを収集、分析するアプローチが今まで大きな成果を上げたが、限界も見えてきたと指摘し、人工知能によって第二言語のプロフィールを明らかにし、データ収集、質的、量的分析をする Automatic Profiling Expert Systems(APES)を提唱し、処理可能性理論で SLA 研究を行う新しいアプローチの可能性を示した。

③ 現代日本文化研究についてのセミナー“A Conversation with Professor Michal Daliot-Bul on Research Methodologies in the Humanities and Social Science”

・ 開催日＆場所:2018 年 9 月 14 日(金)ニューサウスウエールズ大学

・ 講演者：ハイファ大学　Michal Daliot-Bul 氏

Michal Daliot-Bul 氏は日本研究者として、現代消費文化、新しいメディアの形式、若者流行文化、また、経済、文化、政治の交わりにより、新しい文化と心像がどのように生まれたのかについて興味を持っている。そして、それらのトピックを理論的フレームワークで検証する研究を行なっている。今回の講演は、どのように現代日本文化のトピックに興味が芽生えたのか、また研究の方法論をどのように選び、研究を行ったのかについて話した。小規模なランチ会の形式をとったが、そのメリットは、講演者からたっぷり話を聞けて、たくさんの質問時間があり、十分な意見交換をできたことである。

5.2 そのほかのリソース

リサーチカンサルテイション

ニューサウスウエールズ大学の図書館はリサーチカンサルテイションの支援を提供している。教育実習生は教育実習をしながら、立場上リサーチフェローとしてニューサウスウエールズ大学を訪ねている。よって、自分の研究を進めることも大事である。その過程で、いかにインターネットやデータベース、図書館から自分の研究テーマに関連する先行研究やインフォメーションを探し、集めるかについて不明点や不安を抱くことがあるだろう。そこで、Visiting Junior Research Fellow として、その支援を申請することができる。リサーチカンサルテイションの時間は一回一時間で、一人の図書館スタッフが一対一で図書館がどのような考えでデータベースを分類したのか、どのように自分の研究テーマ相応のデータベースを選び、キーワードを決め、漏れなくデータベースから自分が必要とする文献を探し出すのかを紹介する。研究を行う上でとても役立つサポートである。

https://www.library.unsw.edu.au/research/beginning-your-research/research-consultation

チップス：

1. リサーチカンサルテイションは完全予約制で、図書館スタッフのスケジュールに影響されるので、早めに予約することを勧める。
2. 申請するとき、自分の研究分野やキーワードをよく考えた上で、ピンポイントに提供することが、カウンセラーからより適切なアドバイスをもらえることにつながる。

6.事前学習

6.1 日本語教育実習（2018 年度/前期木曜日 7,8 限）

概要

この授業は､海外教育実習に向けて事前の課題発見や授業の組み立ての基礎を学ぶ機会として位置付けられる。夏休みに UNSW におけるオーストラリア実習に参加する場合、この授業は必須履修となる。この情報は、科目名を含め今年度のものであり、来年度以後変更される可能性もある。

目的

授業の主な目的を 2018 年度のシラバスより引用する。

・学習者の日本語との関わり、ニーズや学習動機などを考慮し、より適切で効果的な教授法を取り入れて実践を計画する。

・教材分析、シラバス・教案作成、教具の準備等を行い、模擬授業を行う。これらを通じ、日本語教師としての基本を身につける。さらに、担当した授業の動画の分析や、クラスでのリフレクションなどを通じ、教師として内省を深め、授業改善を図る。

・グループやペアによる協働学習を通じて、履修者自らが主体的・積極的にクラスを作り上げていく。

・夏休みのオーストラリア実習に向けて国内での準備を始める。

内容

半期 15 回で、講義は以下の二つから構成されていた。

・座学

学習者や教材について、それぞれの特徴について考える。教案は何に留意して書けばいいかを考える。

・模擬実習(2 回)

2,3 人のグループで一人ずつ 10 分と 20 分の模擬実習を行う。発表担当グループは、担当教員から事前に教案について指導を受ける。学習者役は残りの受講生が担い、模擬実習評価表を記入し、良い点と改善を要する点、質問や疑問点についてコメントする。模擬実習の様子は TA が録画し、受講生にメールで配信する。データを受け取った発表者は、文字起こしを行い、着目した領域と気づきも一緒に記述、提出した。

詳細の授業計画を 2018 年度のシラバスより引用する。

	月/日	主な内容
1	4/12	・オリエンテーション ・これまでの「授業」を振り返る
2	4/19	・学習者を知る（日本語とどこで出会っているか→ニーズ分析）
3	4/26	・日本語教科書を知る（テキスト分析）
4	5/10	・初級クラスに登場する文型
5	5/17	・教材、教具について
6	5/24	・日本文化紹介レッスン　デモンストレーション
7	5/31	・ティーチングプラン・教案
8	6/7	・ティーチングプラン・教案作成作業
9	6/14	・ティーチングプラン・教案発表
10	6/21	・模擬実習（1）

11	6/28	・模擬実習（1）
12	7/5	・模擬実習（2）
13	7/12	・模擬実習（2）
14	7/19	・模擬実習（2）
15	7/26	・模擬実習（2）

<u>海外教育実習との相違点</u>

日本語教育実習で経験する模擬授業と海外教育実習で行う授業とは、以下の表のような点で違いが見られる。海外教育実習に参加する履修者は以下の点を考慮し、できる限りUNSW の学生を意識しながら模擬授業に臨む必要がある。

	模擬授業	海外教育実習（UNSW）
環境	第二言語としての日本語	外国語としての日本語
受講生	日本語上級学習者	日本語初級～中級レベル
クラス	10 人程度	30～35 人程度
授業時間	10～20 分	20～120 分
授業担当	発表担当者（2～3 名）のみ	授業を担当する実習生、実習生担当の教員、Jr.先生等
教案	自分で言葉使いや教案を出すタイミング等まで細かく記載	教師のセリフを詳しく書かなくてもいい；授業の内容と活動を覚えるのは大事

6.2 事前指導

<u>勉強会</u>

1 週間おきに森山先生の研究室で勉強会を行った。月曜日の 16:40-17:40 を利用し実習生が集まって森山先生から事前指導を受けた。主にトムソン(2017)「外国語学習の実践コミュニティ―参加する学びを作るしかけ―」を読み、実習生は一人ずつ一章を担当し、レジュメを作って発表した。

詳細は以下の通りである。

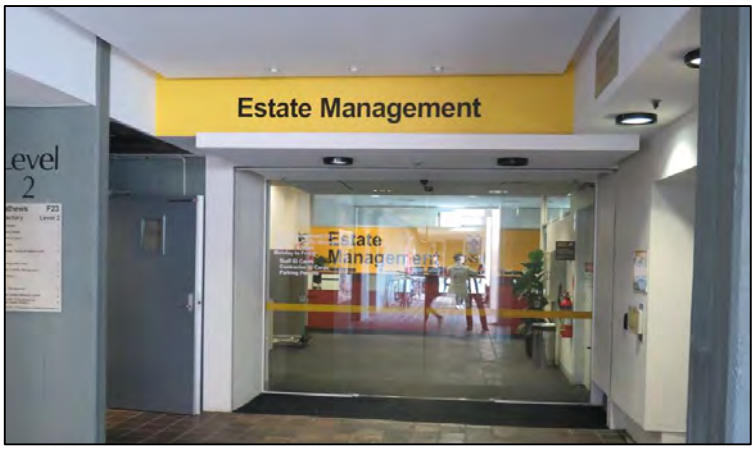
1	月/日	主な内容	担当者
2	5/14	第 1 章　外国語学習というチャレンジと実践コミュニティ	（森山先生）
3	5/28	第 2 章　「実践コミュニティ」とは？―実践コミュニティの理論―	姜芳雨
4	6/11	第 3 章　ニューサウスウェルズ大学という教育現場	王丹叶
5	6/25	第 4 章　最初の日本語コース	劉文鈺
6	7/9	第 5 章　実践コミュニティの視点で内省する	程寧
7	7/23	第 6 章　漢字学習の実践コミュニティ？	宣婷婷

【Part 2】
生活と実習感想

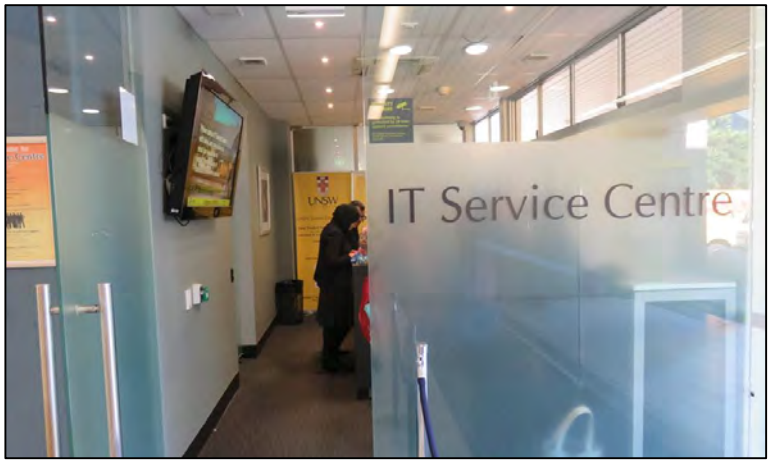
1.諸手続きと生活

1.1 諸手続きについて

- 学内 ID カード
  - ✧ 説明：まず大学内の FM アシストルームへ行き、実習に行く前に受け取った UNSW からの受け入れ許可のメールを見せる。その場で写真を撮ってもらい、ID カードはすぐ発行される。ID カードは実習授業の時だけではなく、実習で使う部屋に入る際に必要となる場合もあるので、カード発行後に、トムソン先生を通じて部屋に入れるように手続きをしてもらう。このカードは、学内にいるときは常に着用する。
  - ✧ アドバイス：①実習に行く前に受け取った UNSW からの受け入れ許可のメールを持参。②その場で写真を撮るので、外見を整えておいたほうが良い。③ID カードをいつも手元に持つ。



- 学内 ID アカウントとパスワード
  - ✧ 説明：ID カード発行後、FM アシストの下の階にある IT サービスセンターへ行くと、担当者が ID アカウントとパスワードを設定する方法を教えてくれる。このアカウントとパスワードは、学内 WIFI・パソコンの利用や、学内サイトにログインする際、必要とされる。
  - ✧ アドバイス：①IT ルームではパソコンが 2 台しかないので、実習生の人数が多い場合は早めに行ったほうが良い。②忘れても困らないように、発行してもらったパスワードを手元にメモしておいたほうが良い。



- 学内でよく使う建物
  - ✧ ・C20：授業以外によく使われる建物のことである。C20 の二階には、日本語の先生方のオフィスがあり、実習生控室や印刷室など、実習する際によく使われる設備もすべてそこにある。
    ・実習生控室：UNSW の研究員や院生が使われる部屋を借りて控室としている。控室に置いてある机とパソコンが人数分借りることができる。部屋は実習生専用ではないが、借りた机とパソコンは実習期間中にほかの人が使わないことになっている。
    ・印刷室：C20 の二階には印刷室が 2 つある。無料で USB から印刷したり、教科書の必要な部分をスキャンしたりすることができる。紙は持参しなくて良い。
    ・食事室：控室では食事ができないが、二階に飲食可能で、電子レンジ・冷蔵庫や、食器の洗い場などの備えつけられている部屋がある。また、廊下や芝生で食事しても良い。
    ・給湯室：二階にはお湯がもらえる設備もついている。

- 学内 Moodle
  - ✧ Moodle：UNSW では、授業で先生と学生が情報を共有できるネットサービス(Moodle)がよく使用されている。このページでは先生が授業の教材をアップロードしたり、学生が宿題を提出したり、イベントや授業についてのコメントを投稿したりすることができる。実習生も担当するクラスによって Moodle を使用する場合、担当授業の先生により Moodle に追加手続きが行われる。追加されたら、先生と同じ権限を持ち、同じサービスを使えるようになる。
  - ✧ アドバイス：追加手続きには時間がかかるため、初日に確認しておいた方が良い。

1.2 生活について

- お金
  - ✧ 仲介会社：総額 211,700 円
    ・航空運賃 145,240 円（航空券代 126,000 円＋空港諸税等 13,840 円＋予約手数料 5,400 円）
    ・ビザ手数料 39,960 円

・ビザ料金 12,000 円
・海外旅行者保険 14,500 円

✧ 宿泊費（シェアハウス、下に詳述）: 100,300 円（5 週間＝35 日分）

✧ シドニーにいる間に使ったお金:約 150,000 円（クレジットカードと現金の総計）

- 交通手段

✧ 交通カード：OPAL カード
・ほぼ全ての公共交通機関で利用できる便利でお得な IC カード
・シドニー空港に着いたらすぐ買う
・日曜日はどの交通機関でも、どれだけ乗っても＄2.50/1 日
・シドニーしか使えない

✧ バス：メインの交通機関
※アナウンスは一切ないので、どこで降りるか事前に確認しておく
・いつも時間通りに来るわけではないので、予備案を準備しておく
・揺れが激しいので、車酔いしやすければ薬を持っていく

✧ 電車
・観光に行く際に使う
・帰国する時に乗る空港までの電車が特に高く、＄10 以上かかる

✧ 船
・観光に行く際に使う、景色が良い
・日曜日ならどれだけ乗っても＄2.50/1 日になる交通機関に含まれる

- 買い物

✧ 物価：東京より高い。特に食べ物が高い。

✧ スーパー:Woolworth と Coles という 2 つの大きなスーパーが至る所に見られる。
Coles で買うことが多かった。

✧ アジアショップ:大学を出てすぐのメイン道路にアジアショップがいくつかある。
アジア系ものがなんでもそろっている。

✧ お土産
・チョコレート（メイン）：スーパーで割引をしている時に買う。Timtam など。
・コアラのおもちゃ：Manly Beach の近くの店舗が比較的安い。
・ワイン：＄10 以下で美味しいワインが買えるらしい。

✧ ショッピング：主にシティーの Sydney Queen Victoria Building

- 観光

✧ Opera House：シドニーの定番

✧ Harbour Bridge：ぜひ橋を渡ってみよう

✧ Park 系：どこも素敵

✧ Taronga Zoo：コアラと近い距離で写真を撮ることができる
ただし、コアラと写真を撮れる時間を必ず事前に調べておく

✧ Blue Mountain：シティーから遠く離れているが、行ったら後悔しないところ
8 月 9 月は寒くて風が強いので、厚めの服を用意

✧ Manly Beach：天気が良い日にぜひ行ってみよう。近くの店がシティーより安い

✧ Bondi Beach：ビーチの近くに住むなら歩いてここに行くのがよい

- 宿泊
  - ✧ シェアハウス探し：Airbnb
  - ✧ 家賃：5 週間（35 日）総額一人で 6018 元（約 10 万 300 円）
  - ✧ 場所：8-10 Hill St, Coogee NSW 2034 オーストラリア
  - ✧ アクセスと周辺環境
    - ・学校までバスで 10 分。バス代は往復約 5 ドル
    - ・学校まで歩いて 35 分
    - ・Coogee Beach のすぐ近く、バス停は海の隣。散歩と日の出を見るにはおすすめ
  - ✧ シェアハウスの設備：
    - ・寝室×3（シングルベッドの部屋 1 つ、ダブルベッドの部屋 2 つ）：二人で一つの寝室を使う。ベッド、布団、タンス、ハンガーラック、ベッドの隣に間接照明などがある。エアコンなし。
    - ・応接間×1：ソファー、テレビ、机、ごみ箱（ゴミ袋はオーナーが補充してくれる）あり。エアコンなし。
    - ・ベランダ×1：洗濯物を干す場所、ソファー、机
    - ・キッチン×1：電子レンジ、冷蔵庫、ケトル、包丁や茶わんなど料理に必要な道具と調味料がそろっている。洗剤、スポンジなどもある。
    - ・トイレ×1：便器、トイレットペーパー（オーナーが補充してくれる）、消臭剤
    - ・シャワー室×1：ドライヤー、シャンプー、コンディショナー、綿棒、コットンあり。スリッパ、石鹸なし。
    - ・洗濯室×1：洗濯機、乾燥機、洗剤
  - ✧ 食事：提供されない。自炊（＊外食は非常にお金がかかる）

- 8、9 月の季節
  - ✧ 気温：昼夜の寒暖差が激しい。常に上着を持っておいたほうが良い。
    - ・8 月は厚めの上着（コート、ダウン）が必要。
    - ・9 月は 8 月より暖かくなり、薄いセーターぐらいで大丈夫。
      虫も出てくる。虫よけを持って行った方が良い。
  - ✧ 天気：晴れの日が多い。風は冷たくて強かった。
  - ✧ 湿度：日本の冬より乾燥している。
    →加湿器を持って行ったり、常にクリームを塗ったりして乾燥から身を守る。

2.実習を通して学んだこと

＜程寧＞

1.実習の成果

事前学習を通じて実習の基礎知識を勉強したが、まだ非常に不安だった。しかし、教壇に立って教えたとき、楽しくて無意識のうちに慣れた。実習に参加するかどうかを迷っていたが、参加してよかったと思った。

5 週間の実習で、指導先生から貴重なアドバイスをいただき、大変勉強になった。中国とオーストラリアの日本語教育システムは異なるため、教師と学生の役割、及び授業の形式にも改めて認識できた。オーストラリアの日本語教育は文法中心ではなく、学生のコミュニケーションを中心とした指導法をとっている。具体的に、教師は一方的に教えるのではなく、「黒子」として学生を主体にし、学生のペア活動やインターアクションを重視する。このように、非常に恵まれた環境で教育を受けている UNSW の学生たちがうらやましく、自分の学生時代にこのような教育を受けられていたらよかったと思う。

二人で同じクラスで実習したので、一緒に協力して助け合いながら、教案を書き、練習した。そして、お互いに二人の実習の様子を見てコメントした。そのため、チームワークと練習が非常に大切だと感じた。さらに、4 つのクラスで同じ内容を教え、同じ教案に沿って教えることはできなかったため、各クラスの雰囲気によって、教案を調整する必要があることがわかった。

最後に学生と親しい友達になり、送別したとき、プレゼントとメッセージをもらって感動した。可愛い学生たち、素晴らしい先生たちに出会って本当によかったと思う。そして、最後の反省会で指摘されたことを生かしてもう一度教壇に立ちたいと思った。

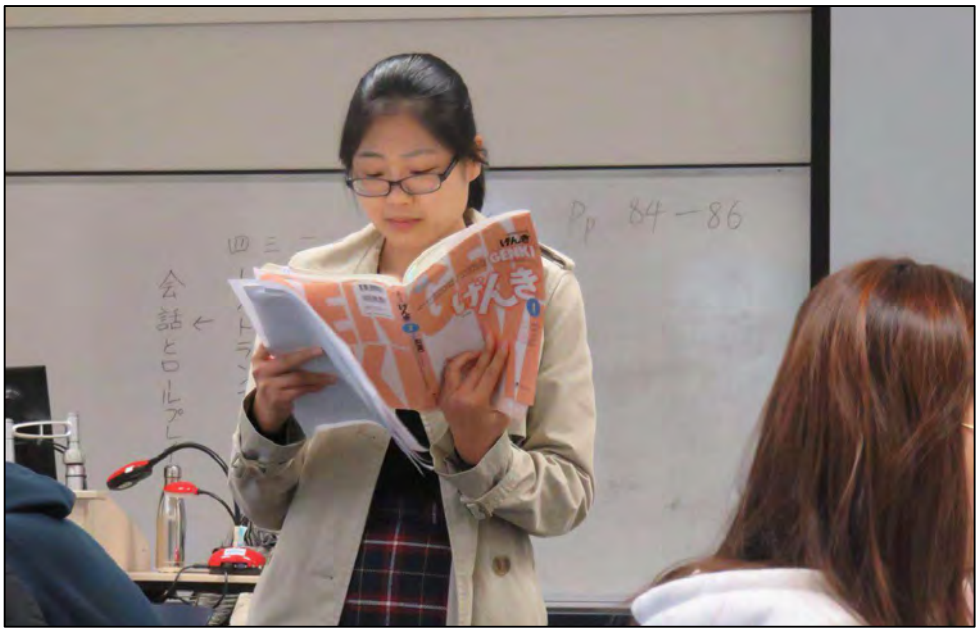
5 週間の実習は短かったが、一生忘れられない思い出になった。充実な実習を通じて大変成長し、先生になりたい気持ちはより強くなった。

2.今後の課題

・教案を作る時、学生の反応や質問などを予想する。
・学生の反応を見て教案を調整しながら教える。
・学生のタイプ（性格、できること、できないこと）を覚える。
・学生同士が聞き合い、助け合うことができる雰囲気を作る。
・タスクを分かりやすく説明する。
・うまく行けなかった状況について、「どうして」を繰り返して反省する。
・自然な発音を身につけるために、自分の発音を練習する。
・授業を教えるとき、教師の言葉を最小限にし、より学生の発話を増やす。

3.今後に向けて

最初の気持ちを忘れずに、実習でいただいた貴重なアドバイスとスキルを生かし、自分なりの教え方を見つける。そして、「学生中心」を意識しながら、経験をためていい教師になるために頑張りたいと思う。



＜劉文鈺＞

1.実習の成果

UNSW での 5 週間は良い刺激をたくさん受けて、実りが多い研修であった。

まず、これまで学んだ理論と教育現場での実践を関連づけてより深い理解ができた。例えば、バイリンガルの子供たちが抱えるアイデンティティの問題、多言語話者の言語使用の状況などは、スピーチ・コンテストやキャップストーンという授業を通して実感を伴い、よくわかるようになった。また、教授法としての学びについては、先生方の各年の授業を見学させていただく中で、学ぶことが多かった。特に授業の目標を意識しながら、それに基づいて、何を練習させ、何を理解させ、何を考えさせるかを常に念頭におくことなど、たくさんのヒントを得ることができた。授業後に毎回開かれる反省会では、福井先生から学生の関心を引き出す方法、文法の練習から活動への移り方、雰囲気や学生の反応がクラスによって異なるため、その違いに対応するそれぞれの方略などを丁寧に教えていただき、将来の実践にも活かせると思った。なお、パートナーの程さんから異なる教え方を見ることができ、自分の視野が広がり大変勉強になった。良きライバルであり、良き友人に出会い実習を最後まで乗り切れたのも、今回の大きな収穫だと思う。最後に、多くの学生に「先生がいないと、寂しくなる」や「先生、ありがとう」と言われ、学生との信頼関係が築け、良い交流ができたと感じた。

2.今後の課題

最後の反省会で、昔から強調されてきた「学生中心」とは何かについて討論を行った。飯田先生が教案の作り方について、先生のセリフより、学生に質問される際の返答のバリエーションを豊富に用意しなければならないと提言し、橋本先生から「学生中心」という言葉に固執することなく、限られた空間の中で何かできるかを考える必要があるなどといった助言を受けた。これについてはこれからも考えていきたいと思う。また、「先生はどんな役割を果たすか」という問いに対し、トムソン先生が Project manager というキーワードを提示し、考えさせられた。学生がどんな知識、スキルと経験（いわゆる Funds of knowledge）を持つのかを判断した上で、それに応じた教育計画を立てて学生が既に持っている Funds of knowledge を有効に働かせるということを今後も考え続けなければならな

いと思う。

3.今後に向けて

今回の教育実践を通し、外国語教育に、認知や思考力の発達の側面から捉える可能性があるということがわかった。「島」構成のクラスで、学生たちの日常生活に直接繋がるテーマを選択し、様々な形の練習と活動を行うことによって、クラスメートと共に学び合い、問題を解決していくプロセスの中で習得すると思う。国の教育政策や文化により教授法も調整する必要があるため、実際にどの程度他の教育現場で応用できるかは疑問だが、第一歩は今回の実習で学んだ貴重な経験を将来の教壇に活かし、学生に外国語学習以外に、やりがいが感じられるものを加え、知的好奇心を刺激し、思考力、判断力などを伸ばしていくことを目標としてさらに頑張っていきたいと思う。

＜王舒茵＞

1.実習の成果

UNSW の日本語教育と今まで自分が学生として、または教師として経験した言語教育とはどのように異なるだろうか？「学生中心の授業」「実践コミュニティ」というのは、どういうものだろうか？このような授業は実際どういうものだろうか？教師が中心となる授業より、「学生中心の授業」をとることが、学生にどのようなメリットをあたえられるだろうか？事前学習を通じて、UNSW の日本語授業のあり方をある程度知ったつもりだが、やはり現場で実際に見学し、授業に挑み、身をもって経験したことが大事である。実習に参加することによって、たくさんのことを学べた。また、日本語教師になるには、自分がまだまだだと、問題を意識させてくれた。

毎回授業の前に教案を立て、先生のご指導によってそれを修正し、実際に授業をし、自分で問題を反省し、また先生のご指摘をいただいた。最初に自分が教案を作成した時、自分が受けた、教師が中心になる授業の影響が強くて、1 週間見学したにもかかわらず、どうしても自分が文法を説明して、学生に、自分の話を聞かせようとしていた。それで、最初の授業では、学生の話す時間、練習する時間が減り、また、事前で決めた授業の目標も終わらずに時間がすぎた。飯田先生のご指摘により、やっと「学生中心の授業」を考え始めた。授業で扱う文法項目に対し、自分の説明を簡潔にし、クラス活動に時間をあたえる。

また、説明する際、メタ言語的の説明を与えるより、文脈を与えて、文脈を与えて、学生に感じさせてもらうことなどのことを試みた。また、教案を作る時の注意点として、ただ時間の枠を埋めるのではなく、一つのタスクを通じて、達成したい目的をちゃんと考えてから設けることや、例文などを出す際に、ちゃんと学生のレベルを考えて、習った文法と単語をチェックすること、できるだけ現実的、日常的な（日本人らしいまたは学生の生活にある）日本語を使用すること、パワポを作る時、文字のフォントとサイズを注意すること、お二人の先生のご指摘と自分の授業を通じて、それらのことの大切さを覚えた。

また、一つの授業に、自分だけではなく、最初に教案を立てる時から、同じく二年生を担当した宣さんと話し合い、授業中に指導の先生、実習仲間たち、上級生の先輩先生のサポート、一つのグループの中には学生たち互いの助け合いなど、教師、学生の枠に限られず、教室にいる全員が共に学び、話し合い、まさに一つのコミュニティになることが今まで経験したことのない、楽しさを感じた。

2.今後の課題

しかし、以上のことで、やっと「学生中心の授業」になったかと言うと、そうでもない。「まだ学生に何かをさせる」という考えでいることから、まだ「学生中心の授業」をわかってないよ」と飯田先生に言われたことがあった。また、中村先生に、「教師は教えるのではない。では、教室で教師は何をするか」と言われた時、何も答えられなかった。しかし、学習者の主体性の重要性を身をもって実感した。一年生の授業から、Capstone までの授業まで、レベルが違っても、学生が授業の主人公となり、自ら積極的に学び、調べ、話す姿を見て、それこそ教育のあるべき有様ではないかと思っている。だから、その 5 週間が自分の中では「学生中心の授業」を学ぶ時間より、可能性を示唆し、問題提起の 5 週間である。

また、自分が日本語教師として必要な知識、素質がまだ欠けていることを痛感した。漢字の書き方、書き順、授業中の姿勢、クラス全員、グループ、一人の学生に話す時に違いなど、まだたくさんまなばないといけないことがある。

3.今後に向けて

短い 5 週間だが、経験したこと、学んだことをこれからの機会で生かし、「学生中心の授業」「教師は何をするか」の答えを追いかけたいと考えている。

＜宣婷婷＞

1.実習の成果

実習に参加する前にずっと「日本語学習者」として勉強してきた私は、日本語を教える経験が全くなかった。教壇に立つことがうまくできるかどうか自信を持っていなかった。また、「学生」という役割から「先生」に変わることにも慣れていなかった。どのように準備して教えるかだけではなく、どのように学生と付き合うのかも課題の一つである。したがって、自習の第 1 週の目標を自分の居場所を見つけることに設定した。

実習の 5 週間の間に、だんだん自分の役割を意識し、教師としての苦労もわかった。実習前の大学院生の授業では、「学習者の背景を知る」「学習者のモチベーションを引き出す」「スキャフォールディングが大切だ」が常に強調されていたが、実践するのは難しい。私が担当した二年生は 100 人を超えた。学生一人一人の名前を覚えるだけでも十分大変だったが、性格や背景などが分かるには、より時間がかかった。二年生にはチュートリアルのクラスが四つある。授業をした時、それぞれのチュートリアルの雰囲気とペースが違うため、教師は自ら授業のペースを調整したり、わかりやすい言葉に変えたりすることが多かった。遅れた学生に気づいた後、意識的にその学生の状態を見ながら気配りする必要があると思う。

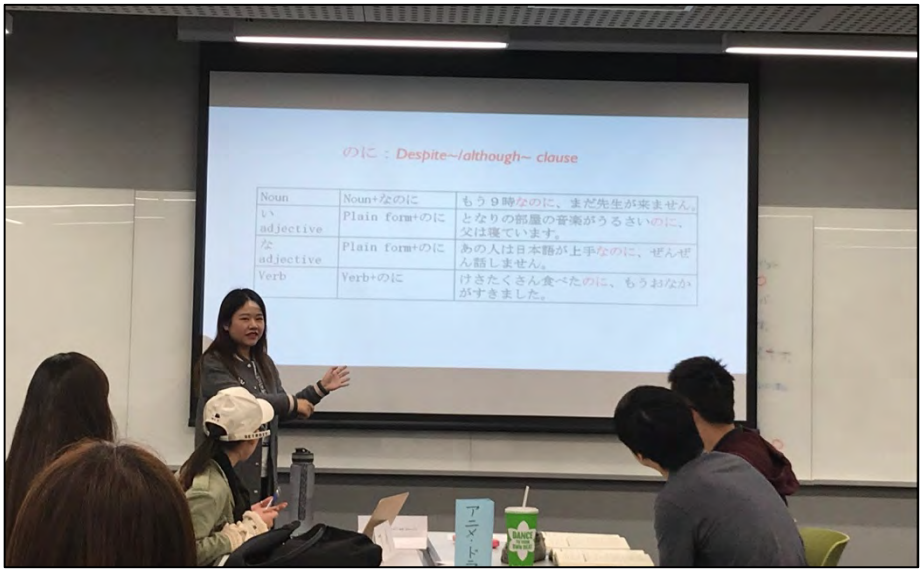
自分がノンネイティブの先生なので、注意点をいくつかまとめた。例えば、教案を書いた後、ネイティブの方に一緒に内容を確認してもらうこと、実際に教える前に、他の実習生の仲間の前で練習し、フィードバックをもらってから教案を直すこと、日本語の漢字と中国語の漢字の細かい違いを心がけることが大切である。しかし、ノンネイティブだからこそ、学生が難しいと思うところを知っている。実習の間に、私は「使役形」「受身形」「使役受身形」を教えた。中級学習者にとって、文の活用もさることながら、動詞の語尾の変化さえなかなかできなかった。その時、どのように文脈と繋げながら学生に理解してもらうかが一番難しいことであった。一方、UNSW の日本語クラスで中国人の学生がとても多くいるため、討論した際、中国語での説明が多かった。理解した中国人の学生はまた英語で他の国の学生に説明してもらった方が有効であった。

2.今後の課題

日本語教師初心者の私は今後の課題がまだたくさん残っている。まず、日本語を向上させることである。授業の中で聞いたことがない日本語のことわざ（のれんに腕押し）が出たので、今後日本語の面も頑張らなければならないと自覚した。それに、教師の役割についても深く考える必要があると思う。「教師は特に教えなくてもいい」と UNSW の先生から言われた。学生中心型授業に変わっていることを知っているにも関わらず、先生は一体どうすればいいのかも今後の課題の一つになる。

3.今後に向けて

授業で学んだ理論知識を実際の授業に生かし、授業で起こった問題を解決する。



＜王丹叶＞

1.実習の成果

夏休みにオーストラリアのニューサウスウェールズ大学（UNSW）で 5 週間実習し、3 年生と 4 年生の授業に参加した。教壇に立ったのは 3 年生の Tutorial である。教壇に立つ前に教案を書いたり、資料を作ったり、模擬練習をやるなどの準備から、後の反省まで、授業のやり方について大変勉強になった。5 週目に 3 年生のインターアクションテストがあり、学生たちのテストの相手になって、テストストラテジーと談話ストラテジーについて、貴重な経験を得た。4 年生の授業では主にサポーターの形で参加した。先生が教鞭をとる姿ではなく、学生が自分の興味と必要に応じて深く学べるように、いろいろなリソースを学生に提供する姿を見た。また、Capstone ではグループに入り、日本語そのものを勉強するのではなく、日本語を使って共同研究をするというような授業形態を初めて見て、印象に残った。このように 5 週間でいろいろ見て、参加して、経験してきたことを通して、教壇に立つ経験を積んだだけでなく、実習先が提唱する「学生中心」の教育観はどのようなものかを前よりかなり深く理解できた。さらに、毎週木曜日はゼミのような勉強会があり、実習のメンバーはそこで自分の研究を発表し、そちらの先生方や先輩方から多くの貴重なコメントを得た。

大学内での学びだけでなく、シドニーで一番レベルが高い女子高校に訪問して、そちらの先生のとても熱意のこもった授業とまじめな生徒に感動させられた。そして、国際交流基金が主催した講演も聞きに行った。英語の内容はわからなかったが、雰囲気だけでも学ぶことができたので、行ってよかったと感じた。

コミュニティでは、先生と仲間のおかげで楽しく過ごすことができた。また、実習する間に、ちょうど東北大学も交換留学のプログラムがあって、私たちが担当する 3 年生と一緒に授業に参加した。UNSW で東北大学の皆さんとも日本からの学生として、すぐ仲良くなり、熱く話すことができた。UNSW で友達もたくさんでき、帰る前は一緒にご飯を食べに行ったり、プレゼントをもらったりして、いい思い出をたくさん作ることができた。

2.今後の課題

「学生中心」という教育観は一種の考えとして、やり方に拘らず、それぞれ違った教育現場で対応する必要がある。UNSW のやり方がそのままほかの教育現場に当てはまるとは限らず、状況に応じて変えなければならない。そこで、UNSW で経験したことを踏ま

え、中国の日本語教育現場でどのように「学生中心」の教育観を取り入れるかを検討する必要がある。

3.今後に向けて

UNSW で教壇に立った際に至らない点が多く見つかったので、今後もし教壇に立つ機会があれば、今回の反省点を改善していきたいと思う。例えば、授業のやり方を考える時、学生の性格も考慮に入れて方法を変えつつやる必要があることが挙げられる。また、教壇に立つ経験はまだ浅いので、学ばなければならないことがまだ山ほどある。今の理論的学習や自分の研究から、今後の日本語教育現場に臨むまで、今回の実習で得られたものを十分生かしてやっていきたい。

＜姜芳雨＞

1.実習の成果

私は中国人日本語学習者として、日本に来る前には 4 年間中国で日本語を勉強した。同じ JFL（Japanese as a Foreign Language）環境にいる UNSW の日本語学習者の気持ちを理解でき、自分が学習者の時得た教訓を彼らにシェアできるだろうと思って、この海外実習に参加した。

今回の実習は主に日本語 3 年生クラスを担当して、4 年生クラスではサポーターとして参加した。そして、1 年生と 2 年生の授業にも見学に行った。4 つの学級は内容がつながっているようだが、先生の教え方や授業の進め方は全然違うと感じた。全体的に一貫性を持ち、教員はそれぞれ自分の好きな教え方で授業を教えるのは UNSW の日本語教育システムの一つの特徴ではないかと思った。

三年生の授業を担当した際は教師側として、自分が学んだ日本語を教えることができ、自分の専門性を活かせるようになった。そして、もう一回学んだ知識を振り返って、教案を作り教えることは自分にとっての復習になり、日本語能力も上達したと感じた。又、3 年生の担当の教員から沢山のコメントやアドバイスをいただいて、学生に対して適切なある教え方を学ぶことができた。

4 年生とキャップストーンの授業に参加した時は、自分が研究者として、研究に関する知識やスキールを学生にシェアした。また、自分も学生の発表の中で、新しい研究方法や視点を勉強することができた。つまり、一方的に提供するだけではなく、お互いが成長したと感じた。

2.今後の課題

実習の前はトムソン先生が編集した「外国語学習の実戦コミュニティ」という本を拝見したが、実習を通してわかるようになったことはいっぱいあった。各学級の学生はそれぞれの役割を持って、言語を勉強しながら、その言語はコミュニケーションの媒介となったり、新しい文化を知る道具になったり、学生達が色々なところで実践を行なった。さらに、シドニーにいる日本人もその実践コミュニティの一環となって、日本社会、日本語、UNSW の日本語学の学生すべてがつながったように思われた。このような考え方は興味深く、これを今後の課題として、もし機会があれば、中国の日本語教育にも試してみたいと考えている。

3.今後に向けて

私にとって、今回の教育実習はただの実習ではなく、国際の交流にもなった。それは日本とオーストラリアの文化交流だけではなく、中国の文化も含めて、お互いの知見をシェアすることができたという貴重な経験だと思う。

おわりに

程寧

今回の実習に参加した私達は全員中国人留学生であり、中国の大学では日本語を専攻していた。日本の大学院に進学してからは、授業や研究では日本語教育の理論面について考えている。今まで学生の立場しか経験してきておらず、教壇に立つチャンスは少なかったので、実践面での経験が欠けている。しかし、将来、日本語教育者として活躍するには、理論と実践両方の知識が不可欠である。そのため、今回の教育実習は貴重な実践の経験であった。シドニーでの教育実習では、UNSW で教壇に立って実習するだけではなく、North Sydney Girl's High School も訪問、見学した。多様な教育実践の場を目にし、緊張や不安などの壁を超えて、中国と日本の日本語教育と異なり、新しい教育方法を体験することができた。

私達が実習を通じて成長するには、先生方や学生達のサポートが不可欠であった。最初は、日本語母語話者ではなく、英語もそれほど上手ではないので、自信がなくて大変不安であった。教壇実習がうまくいかず自己否定して悩んだこともある。その時、先生方は助けてくださった。森山先生はいつでも私達のそばにいて、皆の実習の姿を録画して直後にコメントしてくださった。そして、毎回自習した直後に反省会を行なって、各自の指導の先生からフィードバックをいただいた。トムソン先生、福井先生、橋本先生、岡本先生、飯田先生は毎週のミーティングで 1 人 1 人の悩みをきちんと聞いて、有効なアドバイスをしてくださった。毎回先生方の言葉を聞くことで、改めて自信を持って元気満々になることができる。また、非常勤講師の中村先生や大浜先生や松井先生にも授業見学をさせていただいた。そのおかげで、教壇実習が少しずつ上手になった。実習面の指導だけではなく、生活面においても、お弁当や調味料などをいただいたり、スーパーやレストランなどを紹介していただいたりして、先生方は私達を安心させてくださった。そして、日本語クラスで学ぶ学生の皆さんも私達を温かく迎え入れてくれ、中国語ができる学生も通訳者として助けてくれた。学生との距離感が近くなり、学生に信じてもらえることで、実習の緊張と不安が和らいだ。学生の立場で考えて学生の気持ちを理解でき、中国と日本の学習・生活経験が役に立った。UNSW 大学院生の JR 先生にも実習期間中多大なサポートをいただいた。先生と学生がいつでも応援してくださり、そのおかげで、教師としての楽しさをしみじみと感じて日本語教師への憧れもより強くなった。そして、毎週の院生勉強会で、皆さんから自分の研究に大切なアドバイスをいただいた。実習のおかげで、私達の関係も強くなり、UNSW の先生と学生の絆もできた。将来それぞれが別の場所で日本語教育に携わることになったとしても、この経験を生かし、きっと何らかの形で協力し合えるだろうと考えている。今回の教育実践の現場に触れる機会で学んだ知識は今後必ず活用されると思う。

実習前の事前学習のキーワードに「実践コミュニティ」という言葉がある。UNSW での日本語教育実習を通して、実践コミュニティの大切さを実感することができた。様々な実践コミュニティができて協力し合い、教室内外の学習としても、キャプストンの発表としても、人的リソースを活用して効率的にできるようになった。それは日本語を学ぶ学生の中だけではなく、私達実習生の中にもあると感じた。例えば、協力して教案を作り、一緒に演習することができる。誰かが教壇実習をしている時、別の実習生がサポートできるだけではなく、実習の姿を客観的に見てフィードバックができる。スーパーのセール情報をシェアする。観光地への旅行計画を一緒に調べて作る。冗談を言い合いながら一緒に料理を作ってシェアする。誕生日の人がいたらサプライズを準備してお祝いする。実習内容に限らず生活面においても力を合わせて、まるで 7 人家族のように支え合って過ごすこと

ができた。これは私達実習生の中でもコミュニティを育てることができた証拠だと思う。将来、必ず別の場で多様なコミュニティができて、実習の経験が活かされると思う。

今回の実習の実施にあたり、森山先生にはご多忙の中にも関わらず、始めのオリエンテーションから奨学金に関する交渉や渡航や宿泊などに至るまでの様々な手配、事前学習など多方面からお世話をしていただいた。そして現地での生活や教壇実習についても直接 1 人 1 人に温かいアドバイスをくださり、観光プランを作って私達を連れて観光に行ってくださった。実習から生活まで非常に細かいところまで考えてくださって父親のように私達の大きな心の支えとなってくださった。

「日本語教育学実習」の授業を通して、加納先生から教材の扱い方や教案・教材の作成、授業での振る舞いなど、教室指導の基礎となる大切なことを優しく教えていただいた。さらに、以前に実習に参加した先輩方からも事前にアドバイスをいただき、渡航に備えることができた。

改めて、今回の日本語教育実習に際してお世話になったお茶の水女子大学の先生方、UNSW の先生方、奨学金などでお力をいただいたお茶の水女子大学の国際課の皆様など、ご協力いただいた全ての方々に、この場を借りて心からの感謝を申し上げたい。

総評

森山新

今日、日本政府が外国人労働者を積極的に受け入れる方針を下したことにより、日本語教育に対する関心は一気に高まっている。同時に、日本語教師の質保証についても議論がなされ、文化庁の文化審議会小委員会は今年 2 月、第二言語としての日本語教師資格に、教育実習の履修を義務化する方針を固めた。そのような状況の中、日本における第二言語としての日本語教育とその研究をリードしてきた本学の重要性はさらに高まってきたと言えよう。

本学では学部に日本語教育副プログラム、大学院に日本語教育コースを持っている。いずれにおいても、教育実習を含む所定の 26 単位（日本語教育機関の告示基準。法務省入国管理局平成 28 年 7 月 22 日策定の第 1 条第 1 項第 13 号ロ）を満たすことで、日本語教員の要件を満たし、卒業後、日本語学校等の日本語教育機関において日本語教員として活躍する資格が得られる。本学では、学部生に対しては 2016 年より協定校の釜山外国語大学校において、大学院生に対しては 2012 年より協定校のニューサウス・ウエールズ大学において教育実習を行ってきた。前者には 17 名（学部 15 名、院 2 名）、後者には、26 名の学生（院生）を派遣している。前者の実習にはヨーロッパが欧州の統合に際し生み出した共通言語参照枠 CEFR の CAN-DO ステートメントや複言語・複文化主義が導入され、後者では、社会文化的アプローチや実践コミュニティの考えが導入された日本語教育が行われており、どちらも単に日本語を教えるだけでなく、グローバル化した時代に生きるグローバル人材を育成するに最適の環境となっている。対立の絶えない東アジアに共生をもたらすためには、互いの言語・文化を学びあう複言語・複文化主義の考え方や、ヨーロッパが言語教育を通じてヨーロッパ共同体の建設とヨーロッパ人としてのアイデンティティ形成を目指したヨーロッパの言語教育理念は大いに参考になるし、外国人労働者を積極的に受け入れることとなった日本の日本語教育には、移民を受け入れ、多文化主義の立場から共生をめざすオーストラリアの言語教育は、日本の「多文化共生」に欠けている、様々な学びを得ることができよう。そう考えれば、本学が実施する日本語教育実習は非常に理にかない、時代のニーズにマッチしたものであると言えるだろう。

今回の UNSW の実習には合わせて 6 名、釜山を含めると 7 名の大学院生が参加したが、全員が日本語を母語としない留学生であった。そのため日本学生支援機構の奨学金を受けることができず、自費での参加となった。生活費を節約するためにシェアハウスに生活し、また UNSW の先生方の暖かなご支援を受けながら、無事 6 名はミッションを果たし帰国した。当初は全員がノンネイティブということもあり、非常に心配をして学生とともにシドニーに向かい、最初の 12 日間あまりを学生と共に過ごしたが、学生たちは互いに協力し合いながら熱心に実習に励んでいた。ノンネイディブでありながら教壇に立ち、日本語を教える姿は、同じくノンネイティブとして日本語を学ぶ学生たちには大きな希望となり、ロールモデルとなったに違いない。その意味で今回の実習はまた、これまでとは異なる意義と成果があったと感じている。

参加した院生たちは帰国後、それぞれの経験をもとに、自身の研究に着手した。日本語教師として、日本語教育研究者として、彼らにさらなる成長があることを期待してやまない。そして、彼らの活躍が対立多き東アジアに共生をもたらすものとなってくれればと思う。

最後になったが、この実習の成功にあたり、親身にご指導いただいた、UNSW の先生方に心から感謝の意を表したい。

<実習参加者・報告執筆者>※五十音順

王舒茵　　（博士前期課程 1 年）
王丹叶　　（博士前期課程 1 年）
姜芳雨　　（博士前期課程 1 年）
宣婷婷　　（博士前期課程 1 年）
程寧　　（博士前期課程 1 年）
劉文鈺　　（博士前期課程 1 年）

2018 年度
ニューサウスウェールズ大学（UNSW）海外日本語教育実習報告書

2019 年 3 月 31 日発行
発　行　お茶の水女子大学
　　大学院日本語教育コース

〒112-8610　東京都文京区大塚 2-1-1
Tel/Fax　0 03-5978-5691

編　集　　森山新、野村琴菜